



大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

(高1球技大会 5/30)

2016.7  
vol.201



## 「いま」の歴史を憶う。 学校長 飯山 等

昨年後半、傾いたマンションの問題が連日ニュースになっていました。杭が深い支持層にまで打ち込まれていなかった、未到達、根入れ不足が原因でした。私はそのニュースを聞きながら、しきりに私たち自身の在り方に思いが行き、まるで私達自身のこのように感じられてなりません。〈いま〉を地上に華やかに構築することに精力を注ぎ、その果実を評価し愛着するのみで、その〈いま〉を確かに支持する深みにまで根を入れることを怠っている私達自身への警鐘であるように思えたのです。

本校初代校長の清沢満之は、友人近角常観の著『信仰の余瀝』の序文劈頭に、(この序文は「明治庚子臘月」すなわち明治33年(1900年)12月に書かれています)、「宗教は人心をしてその根帯を自覚せしむるものなり」と宣明し、「今や我国家は制度・文物の上において一大開展の歩を進めつつあるにあらずや、確固たる信仰のこの際に必須なる固よりそのところなり」と、一大変化の激しい直中にあればこそ、私たち自身その根・帯を自覚することが、喫緊にして枢要なる課題であることを力を込めて開陳しています。

昨2015年は戦後70年の節を刻む年でした。私自身、いまの歴史性に対する自らの理解の至らなさを思い知らされ、さまざまに教えられた一年でした。その強く心を打ったものの一つが次の高橋源一郎

の「ルソン島慰霊の旅」と題する朝日新聞7月22日掲載の記事でした。1951年生まれの方は叔父の足跡をルソン島に訪ねて、「わたしは目を開けた。青と緑に染められた美しい風景が、どこまでも広がっていた。不意に、こんなことを思った。70年前、伯父もまた、どこかこの近くで、この風景を見たのだ。そして、迫り来る確実な死を前にして、自分が存在しないであろう未来、けれども平和に満ちた、その遙か未来の風景を想像したのではなかったろうか。わたしには、それが疑いえない事実であるように思えた。そして、伯父が想像した、平和に満ちた未来とは、いまわたしがいる、この現在のこのことなのだ。それがどんなに貧しい現在であるにせよ。そのことに気づいた瞬間、そう、ほんとうにその瞬間、わたしは後ろから、伯父に抱きしめられたように思った。そのとき、亡くなった家族たちから託されたわたしの慰霊の旅は終わったのである。過去は、わたしたちとは無縁ではなく、単なる思い出の対象なのでもない。「そこ」までたどり着けたなら、わたしたちの現在の意味を教えてください場所なのだ。」

たどり着いた「そこ」が、〈いま〉を確かに支持する〈過去〉なのか。そのような〈過去〉にまで根入れすることできたのか。それとも未達なまま放擲された「そこ」なのか。深く問われねばならない。

親鸞聖人はわれらの根帯なる「そこ」を《本願》に正受され、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と、自らに聞き、私たちに聞いてくださいました。